



Musicolor

- 音と色の祭典 -

2020年度 国立音楽大学
音楽情報専修、音楽学コース、音楽情報・社会コース
専門ゼミⅠ・Ⅱ 研究発表会

音楽と色には一体どのような関係があるのだろうか。

楽器や音符には、色が付いているものがある。音を聞くとき色を感じる人がいる。

ドレミに色を付けることの普遍性や歴史はどのようなものだろうか。

私たちは「音と色」をテーマに、さまざまな切り口からその関係に迫りたい。

波としての音と光

耳で感じる「音」と目で感じる「色」には、波の性質を持っているという共通点がある。音や光は、周波数(波長)によってどんな高さの音が鳴るか、何色に見えるか決まる。色には色相環があるが、音も1オクターブの12音や五度圏を円のように表現することができる。両者が波であることを普段意識することは少ないが、音と色の関係を調査するにあたって、そのことを再認識する必要があるだろう。

楽器や楽譜への反映

音楽教育には、カラフルな楽器や音符を色で表現した楽譜が用いられることがある。「色音符」や「色彩楽譜」と呼ばれ、音の聴覚イメージを視覚的なイメージとして把握することができる。これは、耳の不自由な方にも音楽を鑑賞していただく方法のひとつで

もある。カラフルな楽器や色音符に用いられる色と音の組み合わせには、どのような共通点があるのか、なぜその色が用いられるようになったのだろうか。

色彩楽器の歴史をみる

「光を出す楽器」について考えた人たちが居る。その中にレオナルド・ダ・ヴィンチの名前が見つかった。現在の調査の中では、レオナルド・ダ・ヴィンチと色彩楽器が関連する情報は見当たらないが、1725年にはフランスのイエズス会修道士で数学者、物理学者でもあったルイ・カステルが、60もの色ガラスを使った色彩楽器を作成していることがわかった。色彩楽器(ピアノ)を使用する楽曲として有名なのはアレクサンドル・スクリャービンの『プロメテエの詩』で《交響曲第5番》としてつくられたものである。しかし、初演では色彩楽器の故障で使用することはできなかったようだ。英語



12色相環
(画像作成:坪内香澄)

の文献しかないため時間を要するが、他に色彩楽器を作った人や、楽器の細かい仕組みについて調査したい。

共感覚

音を聞いたり、数字や文字を見たりすると色が思い浮かぶ感覚を「共感覚」と呼ぶ。研究発表会では、音を聞くと色が浮かぶ共感覚を扱う。作曲家のフランツ・リストや上記のスクリャーピンは、共感覚の持ち主として知られている。共感覚とは何か、共感覚を持つ人にはどのような世界が広がっているのかということに迫る。

色にちなんだ音楽

音楽の中には、色をタイトルに含む曲がある。まずはクラシック音楽の中に色の名前がついた曲は一体何曲あるのか、『クラシック音楽作品名辞典第3版』三省堂(2009年)を手掛かりに調査している。また、石若雅弥作曲《こころの色》や小田美樹作曲(信長貴富編曲)《群青》など、色をタイトルに含む合唱曲は多く、併せて調査を進めている。《こころの色》では、ハーモニーの移り変わりで白紙が色に染まっていく様子が描かれており、《群青》では、離れ離れになった友を思い、距離が遠くなくても群青色の同じ空の下にいることをユニゾンで語っている。クラシック音楽の他にも、J-popを中心に調査を進めたい。

諸外国と日本の色のイメージの比較

日本における色のイメージに強く影響を与えたのは「戦隊モノシリーズ」だといわれており、アイドルグループのメンバーカラーもその影響を受けて付けられたそう。しかし、諸外国において、このような文化の例はまだ見当たらない。文化が違えば色に対するイメージも異なり、音楽に対しても同じことがいえるのではないだ

ろうか。今後、文化による色のイメージの違いや色に対応する音のイメージを日本と諸外国と比較して調査したいと考えている。

芸能と色

歌舞伎のメイクである「隈取り」は役の性質によって色が異なる。赤い隈取りは正義の味方に用いられ、「藍隈」という青を使った隈取りは、公家悪と呼ばれる大悪人に用いられる。また、雅楽では、渡来系の舞をもとに発展した舞楽装束の色は、中国大陸系では赤系統、朝鮮半島系では緑系統を基調としているようだ。

オペラの衣装

オペラの衣装には、作品成立当初から長い間伝統的に受け継がれてきたものや、現代演出が生み出した画期的なものなど、多種多様である。研究発表会では、役柄と衣装の関わりという観点からオペラの衣装、特に色について考察する。

音をアクセサリーに

音楽を聴き、色を思い浮かべてガラスに反映させたアクセサリーを造っているアーティストがいる。音楽を自ら奏で、音をガラスの色で表現し、様々なアクセサリーを作り続けている福村彩乃さんにインタビューする。

音楽と色の関係について、ふとした瞬間に感じることはあっても、真剣に考えることは少ないのではないだろうか。専門ゼミでは、これまでなぞってきたさまざまな観点から調査を進めている。最終的には、それらに何か繋がることはないか検討したい。

研究発表会では、音と色の関わりについて知り、それを感じていただけるように実演も交えながら発表する予定だ。

★研究発表会★

Musicolor -音と色の祭典-

日時

12月10日(木) 18時開演

会場

国立音楽大学
6号館110スタジオ